

ジャン＝リュック・ナンシー 『コルプス』 注解 (二)

柿 並 良 佑
(文化システムプログラム)

本稿は下記の拙稿を承け、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシー (Jean-Luc Nancy, 1940-2021) が1992年に発表した著作『コルプス』に引き続き注解を施すものである。

「ジャン＝リュック・ナンシー 『コルプス』 注解 (一)」, 『山形大学人文社会科学部研究年報』 第22号, 2025年。

底本として変わらず以下を用いる。Jean-Luc Nancy, *Corpus*, Paris, Métailié, 1992 ; 2^e éd., 2000 ; 3^e éd., 2006. その他の文献については上記拙稿冒頭を参照されたい。また以下で同稿へ言及する際には「注解 (一)」と記して頁数を付す。

『コルプス』第二の節は「奇妙な異物 *Étranges corps étrangers*」と題されている。まず冒頭の段落の訳を掲げる。

奇妙な異物¹

一体全体、他に誰が「身体」²という何物かを知っているというのだろうか？ それは歳を重ねた我々が文化のうちで最も遅れ馳せに生み出された物、この上なく時間をかけて傾瀉され、精製され、解体され、組み直された産物である。西洋がその名のごとく落下であるとすれば³、身体はその最後の^{おもり}錘、この落下のさなかに傾く錘の末端だ⁴。身体とは重さである⁵。空間内にある身体＝物体群には引力の諸法則が関わっている。だがまずは、物体にはそれ自体で重さがある。すなわち、身体はそれ自体のうちに降りていったのであり、そのように駆り立てた固有の重力の法則に従い、自らが積む荷と混ざりあっているほどなのだ。言い換えれば、牢屋の壁のようなその厚みや押し固められた土壌のごとき塊と、あるいは着古されてべとつく修道着⁶の重苦しさと、そして結局は体液および骨の比重と混同されてしまうほどに——だが相変わらず、だがまずは自らの落下を背に負い⁷、どこかの^{エーテル}天空から転落して、黒い馬、悪しき馬⁸。

注解

1. 「奇妙な異物」 *Étranges corps étrangers* : 「注解 (一)」, 95頁, 注3に記したとおり、一般に *corps étranger* が「異物」を意味することを踏まえた表現。
2. 「身体」 *« le corps »* : ここでは定冠詞を含めギユメで括られ、「まさに身体というもの」を指示する。

3. 「落下」une chute: 「西洋 l'Occident」という名称はラテン語で「落ちる, 沈む」を意味する動詞 occidere の現在分詞 occidens に由来する。
4. 「鍾」le poids: 広く「重さ, 重量」を指して用いられる語だが, ここではより具体的に解した。
5. 「身体とは重さである」Le corps est la pesanteur.: 硬く訳せば, 「身体は重さというものとして存在する」となろう。この時期のナンシーが「存在する être」という動詞の他動詞性 la transitivité をとりわけ強調していることを考え合わせてもよいが (cf. *Le sens du monde*, Galilée, 1993 ; 2^e éd. 2001, p. 25-27, 35, 47, 57, 93, 111, 120, 142, 193, 202, 209, 214, 235, 237), 同時に, 二つ後の文で「重みがある」と訳した peser という自動詞で言い換えられている点にも留意する必要がある。なお, la pesanteur は「重力」をも意味し, その限りでは後に出てくる la gravité と同義語。
6. 「着古されて [……] 修道着」défroque: 一般には古着や流行遅れの服, さらに転じて奇妙な身なりを意味するが, 元は修道士の遺品や粗末な形見の意 (froc が頭巾や修道着を指した)。西洋的身体のキリスト教的背景を暗示する。

エヴリーヌ・グロスマンは「厚み épaisseur」, 「押し固められた土壌のごとき塊 masse de terre tassée dans le tombeau」, 「べとつく重苦しさ lourdeur poisseuse」という語群にみられる ss という音の繰り返しに注意を喚起する。Cf. Évelyne Grossman, « La chute des corps : le “coup de dés” de Jean-Luc Nancy », Gisèle Berkman et Danielle Cohen-Levinas (dir.), *Figures du dehors. Autour de Jean-Luc Nancy*, Cécile Defaut, 2012, p. 370.

同論考は「墓 tombeau」と「転落した tombé」の近接も指摘しているが, ギリシア語で身体 σῶμα を魂の墓 σῆμα とみなす箇所としてプラトン『パイドロス』250c, 『ゴルギアス』493a, 『クラテュロス』400c, また関連してエンペドクレス断片, DK 31 B 115 (内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』岩波書店, 第II分冊, 1997年, 301頁以下)。
7. 「自らの落下を背に負って」en charge de sa chute: 「引き受ける prendre en charge」というイデオムと, 「荷積み中の船 navire en charge」あるいは「満載排水量 déplacement en charge」のような言い方を掛けた表現と解する。
8. 「黒い馬, 悪しき馬」cheval noir, mauvais cheval: プラトン『パイドロス』における, 魂を二頭立ての馬車に見立てた説明によれば, 左側の「悪い馬」は黒い色をしている (246b, 253e)。身体ではなく魂の説明ではあるが, その上昇と転落のイメージが間接的にせよ想定されているか (248a, 250a)。その他, 古来より不吉な色とされる黒と馬の結合は数多くの伝承や民話にみられ, 聖書では「ヨハネの黙示録」6:5に黒い馬が登場する。

オウィディウス『変身物語』第2巻636行以下に語られるケイローンの娘オキュロエが牝馬(ギリシア語ではヒッペー)に姿を変えられたという挿話について, 一般向けの解説などでそれが黒い馬とされることがあるが, テキストで体色は明示されていない。これはその娘とされるメラニッペー(黒い牝馬の意)との混同から生じたものと思われる。本題から逸れるが参考までに, 19世紀の用例とし

て以下。Cf. Louis Mayeul Chaudon, *Dictionnaire historique, critique et bibliographique*, Ménard et Desenne, tome 30, 1823, p. 258 ; *Les phénomènes d'Aratus de Soles, et de Germanicus César. Avec les Scholies de Théon. Les Catastérismes d'Eratosthène. La Sphère de Léontius ; suivi de La preuve de la juste célébration de Pâques, de fragments divers, et des fastes consulaires de Théon*, trad. L'Abbé Halma, Merlin, 1821, p. 50 ; William Smith (ed.), *Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythology*, Taylor, Walton, and Maberly, vol. 2, 1849, p. 1013. この混乱は古代のエラトステネス作とされる『カステリスモイ』やヒュギーヌスの『天文詩』,あるいは写本としてそれらが伝わった過程に由来するようである。Cf. Ératosthène de Cyrène, *Catastérismes*, trad. Arnaud Zucker, Les Belles Lettres, 2013, p. 58 ; Hygin, *L'astronomie*, trad. André Le Bœuffe, Les Belles Lettres, 1983, p. 56 et 167.

オウイディウスも参照したと思しきエウリピデス『賢女メラニッペー』ではメラニッペーが、「ケイローンケイローンの娘」すなわちオキュロエ(=ヒッペー)を自分の母,その体毛は「栗毛」だと述べている(『ギリシア悲劇全集』岩波書店,第12巻,1993年,235頁)。メラニッペーについてはヒュギーヌスの記述も残存するが,*Fabulae*には母についての記述はない。『ギリシア神話集』松田治・青山照男訳,講談社学術文庫,2005年,252頁;『神話伝説集』五之治昌比呂訳,京都大学学術出版会,2021年,217頁。メラニッペーについては,シケリアのディオドロス『歴史叢書』やアリストファネス『女だけの祭』にもわずかながらその名がみえる(『神代地誌』飯尾都人訳,龍溪書舎,1999年,362頁;『ギリシア喜劇II』呉茂一ほか訳,ちくま文庫,1986年,259頁)。Cf. Cécile Margelidon, « Métamorphoses du nom et jeux étymologiques hybrides chez Ovide : Ocyrhoé / Hippè (Métamorphoses, II, 630-675) », *Revue roumaine d'études francophones*, n° 12, Junimea, 2020.

同じく「黒い馬」を意味する男性名メラニッポスについて,暗示される「暗さ」を同人物の運命に結びつける作品解釈もある(この場合はアイスキュロス『テーバイ攻めの七将』,第410行以下,およびアポロドーロス『ギリシア神話』第3巻,VI,8)。Cf. Sylvie David, « Images en scène : à propos des boucliers des *Sept contre Thèbes* », S. David (éd.), *L'Antiquité et la vie des arts*, Presses universitaires de Franche-Comté, 2012 (<https://books.openedition.org/pufc/732> : consulté le 22 juin 2025). もちろん人物名がいかなる場合にもそのように扱われるわけではない。

(第2-4段落)

高みから,〈いと高き者〉の手ずから¹投げ落とされ,誤れる官能のうちへ²,卑劣な罪へと。災いを招くは必至の身体³,つまりは天体の凍てつく蝕にして黄昏⁴。そうした天体群を後で失墜させるためだけに,我々は天⁵を発明したとでもいうのだろうか?

こうしたことにけりがついたなどとは決して思わないようにしましょう。我々はもはや罪については語らないし,救済された身体を持ち,健康な身体,スポーツ好きで遊び好きな身体⁶を手に行っている。だが,そのせいで災厄が悪化していることは一目瞭然ではないか。その落下がますます喫緊となり,不安を掻き立てるようになってきているからこそ,身体はますます転落し続け,より低劣な方へ落ち込んでいるというわけだ。「身体」とは赤裸になった我々が不安だ。

ん? それを発明しえたのはどの文明かだって? かくも赤裸な身体,結局のところ身体というのは……。

注解

1. 「〈いと高き者〉の手ずから」 par le Très-Haut lui-même: 聖書での神の名の一つである「いと高き者」については「創世記」14:18-20, 「詩篇」9:3ほか参照。
2. 「誤れる官能」 la fausseté des sens: sens はナンシーの鍵語だが、ここでは肉体的欲望の意。
3. 「災いを招く」 *désastreux*: 「注解(一)」, 95頁, 注1参照。ここでは「天体 les corps célestes」と言い換えられているように, corps はつねに身体であると同時に物体の意。「災厄 *désastre*」, およびこの語に含まれる「星 *astre*」については以下をも参照。ジャン＝リュック・ナンシー「星々の遺りもの?」時田圭輔・松本鉄平・市川崇訳, 『多様体』月曜社, 第2号, 2020年, 210, 223-224, 229, 231-232頁。
4. 「黄昏」 *tombée*: 前出の形容詞 *tombé* への連想を誘う。éclipse et tombée froide とあるが, 二つの名詞は一体となって「災厄」の内実を指し, 形容詞「凍てつく *froid*」はその全体にかかると解する。Cf. Grevisse, *Le bon usage*, Duculot, 14^e éd., 2008, p. 556 et 562.
5. 「天」 le ciel: 一般に空, 天空, また古代宇宙論にいう「宇宙」を指すが, 宗教的含意を強調するなら「天国」であり, その場合「失墜する *déchoir*」という動詞は「恩寵を失う」という語義を前景化させる。
6. 「健康な身体, スポーツ好きで遊び好きな身体」 des corps de santé, de sport, de plaisir: de + 無冠詞名詞はしばしば形容詞的に働くが, de plaisir は「行楽 *partie de plaisir*」のようなニュアンスも「好き者 *homme de plaisir*」のようなそれも含むだろう。plaisir という語は「尾も頭もなく」, 「プシュケーは延長されている」, 「一つのエクリチュールについて, 読むべきではないもの」の節にみえる (*Corpus*, p. 18, 22 et 74)。

(第5段落)

奇妙な異物, 〈陰陽〉を備え, 〈第三の目〉を, 〈丹田〉¹と〈気海〉²を蔵する奇妙で異質な身体, 切り込みや彫りを入れられ, 指標を付けられ, 小宇宙へ³, 星座群へと裁断された身体, つまりそれらは災厄というものを知らないのだ。自らの裸性の重さを計ること⁴を免れた奇妙な異物, 記号でいっぱいになった皮膚の下, ただひたすらおのれ自身に集中し⁵, 全感覚を真っ白で無感覚な感覚=意味⁶へと撤回してしまうに至る異質な身体, 釈放の身となった生体⁷, 他ならぬ自己のうちに射出された光から放たれる純粋な光点の数々。

注解

1. 「丹田」 Champs de Cinabre: 道教で身体に三つあるとされる生命の中樞。フランスの著名な中国学者マスベロの記述に従えば, 名の由来は「丹 le cinabre が不死の薬の本質的な成分 l'ingrédient essentiel de la drogue d'immortalité だからである」, 言い換えればその名が「不死の薬のエッセンスと

なる要素 l'élément essentiel de la drogue d'immortalité, すなわち丹砂 le cinabre を思い起こさせるためである」。アンリ・マスペロ『道教』川勝義雄訳, 平凡社ライブラリー, 2000年, 27,138頁。

第一の丹田は上丹田ないし「泥丸宮 le Palais du Nihuan」, 第二は中丹田ないし「絳宮 le Palais d'Écarlate」, 第三は「下丹田 Champ de Cinabre Inférieur」と呼ばれ, 第三のものは「臍から三寸下に à trois pouces au-dessous ある」(同, 28,140頁)。

2. 「気海」Océan des Souffles : マスペロ, 前掲書, 31および160頁参照。体中に息を循環させる呼吸法により「気 Souffle」が送り込まれる場所の一つで, 訳者の注(321頁)によれば下丹田と同じ場所を指す。

3. 「小宇宙へ」en microcosmes : 同じくマスペロによれば「人間の体 [1]e corps humain はつまり一つの世界(小宇宙) un monde (microcosme)であって, 外界, すなわち中国語で言う〈天地〉(大宇宙)と同じである」(前掲書, 26頁)。

若い頃からキリスト教圏以外の文化・思想にも関心を寄せ文献を渉猟したナンシーが, その過程でこうした東洋研究の書に目を通した可能性は高い(西山・柿並編『ジャン＝リュック・ナンシーの哲学』読書人, 2023年, 巻末附録「略年譜」参照)。

4. 「重さを計ること」la pesée : 本書の鍵語の一つで, 後の節のタイトルにも採られる。

5. 「おのれに集中し」se concentrer en eux-mêmes : 「集中 concentration」も本書の鍵語で, 主として身体に対立し支配を及ぼす精神の特性と考えられる。後出の「点 points」についても同様(cf. *Corpus*, p. 23, 28, 39, 54, 66-70, 72, 75, 96, 110 et 149)。

6. 「真っ白で無感覚な感覚=意味」un sens insensible et blanc : 直前の「集中」との関連で, この sens には非物的な「意味」という意味が前景化しているものと思われる。また英訳・独訳ともに「白い blanc」という形容詞を「空の empty, leer」と解するが, 日本語の「真っ白」にもその含意はあろう。

7. 「釈放の身となった生体」corps délivré-vivants : 形容詞 délivré が単数形のため副詞的に用いられていると解し, 「釈放・解放された状態で生きている」というニュアンスを読む。Cf. Grevisse, *Le bon usage*, Duculot, 11^e éd., 1980, p. 417 ; 14^e éd., *op. cit.*, p. 1188 sq. 「生体 corps vivant」は一般に動物や人間の肉体的構造を指す。

(第6-7段落)

たしかに, 彼らの¹語の一つとして, 我々の身体について何事かを我々に語ってくれるわけではない。白人の身体, 彼らからすれば蒼白にみえる身体, 引き締められるのではなくつねに発散しかけており, いかなる指標も切り込みも化粧張り²もこれを押し止めはしない——このような身体は彼らにとって奇妙なこと以上に異質なものだ³。かろうじて何物か⁴と言えるかどうか……。

我々は身体を赤裸にしたのではない。我々は身体を発明したのであり, 身体とは裸性のことであっ

てそれ以外に身体はなく、裸性が何であるかと言えば、すべての奇妙な異物よりもいっそう異質であるということなのだ。

注解

1. 「彼らの語」 *leurs mots* : 次文で強調される「彼ら *ils*」も同様に、「我々＝西洋人」と対比して、前段落で明示されることなく名指された「非西洋」の身体を持つ人々を指す。
2. 「指標も切り込みも化粧張りも」 *aucune marque, ni entaille, ni incrustation* : 前段落で「切り込みや彫りを入れられ、指標を付けられた身体 *corps incisés, gravé, marqués*」とある箇所に対応する。「指標 *marque*」については体に押し付けられる刻印・烙印を、また様々な文化圏にみられる「傷 *entaille*」に「化粧張り・象嵌細工 *incrustation*」を施す例を想起できよう。*incrustation* に *Verkrustung* を充てる独訳は「瘡蓋」の意に解しているのかもしれない。
3. 「奇妙なこと以上に異質な」 *plus étranger qu'une chose étrange* : 本節のタイトルにかけた表現。「変わったこと *chose étrange*」はときに間投詞としても機能する慣用的な言い回し。例としてモリエール「才女気取り」の冒頭、「人の書いたものをむりやり出版するとは、奇怪千万な話 *une chose étrange* である」(『世界古典文学全集』筑摩書房、第47巻、1965年、15頁)。つまり、実際にはよく口にされる「奇妙なこと」よりも、「白人たちが持つとされる身体なるもの *le corps des Blancs*」(単数形に注意)の方が一層「異質」だというわけである。
4. 「何物か」 *quelque chose* : 前文の *une chose étrange* を承けて、異質な身体の異質さを強調する。

(第8段落)

「身体」が〈異質なもの〉¹の名となっている、まったくもってそうになっているといった考えを我々は見事に貫徹してきたのだ。皮肉で言っているのではないし、西洋を貶めているのでもない。私がむしろ恐れているのは、こうした思考が行くつく極限を、その転覆的な力²を見誤ることであり、この極限を通り抜けねばならないという事実思い至らないことなのだ。とりわけ、あたかもそのような思考が生じなかったかのようなふりをして済ませないこと³、神の、〈異質なもの〉の赤裸で蒼白な身体が⁴、長きにわたり絵画の中で横倒しに打ち捨てられてこなかったかのようなふりをしないこと⁵。

注解

1. 「〈異質なもの〉」 *l'Étranger* : 何度も用いられている形容詞の実詞化。通常はレフェランが人間であれば「外国人、よそ者」を指すが、ここでは直後に「まったくもって *absolument*」とあるように、他との比較を欠いた「異質なものそのもの」を指すのだろう。あるいは *corps étranger* と言わずとも、*corps* だけで異質なものの謂となっている、ということか。
2. 「転覆的な力」 *sa force d'arrachement* : 文字どおりには「根こそぎにする力」であり、土木作業に用

いられる機械の「掘削力」などを指す表現が比喩的に用いられている。

3. 「ふりをし(て済ませ)ないこと」 ne pas faire comme si [...] : 提示・説明でしばしばみられるように、不定詞は命令文として用いられる。
4. 「赤裸で蒼白な身体」 le corps nu et blafard : フランス語の形容詞 nu に「赤」の含意はないが、そもそも日本語で強調に用いられることのある「あか(赤)」という語も「赤・明かし・明く・明け」と同根の類をなし(『日本国語大辞典』)、必ずしも具体的な色を指してはいない。対して、blafard の語源である中高ドイツ語 bleichvar < bleich には「青白い」という意味がある。言うまでもないが、「赤裸」の訳語はボードレルの手記「赤裸の心」 *Mon cœur mis à nu* のそれに倣った。
5. 「絵画の中で横倒しに打ち捨てられて」 jeté [...] en travers du tableau : 「絵画 [le] tableau」は芸術の一ジャンルとしてのそれ (peinture) ではなく、具体的な作品およびそこに描かれる光景を指す。『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』(15世紀)、ティツィアーノ(1559年)、カラヴァッジョ(1602-1604年)、アドリアーン・ファン・デル・ウェルフ(1703年)、ドラクロワ(1848年)ら、数多くの作品の主題となった「キリストの埋葬」等が想起されよう。岡田温司『キリストの身体』中公新書、2009年、160頁に挙げられているアンドレア・ディ・リオオーネ(レオーネ)作「キリストの埋葬」も好例だろうが、2025年現在、国立美術史研究所(INHA)のサイトでは「死せるキリストを崇める天使」の題が付されている(<https://agorha.inha.fr/ark:/54721/78afc82a-97a6-434d-9534-ae321e461a02> 2025年7月17日最終確認)。その他、パブリック・ドメインとして集められた画像を参照することができる(https://commons.wikimedia.org/wiki/Paintings_of_Entombment_of_Christ)。

後年、ナンシーはジャコメッティの詩に想を得た裸体論『私たちは、裸』を上梓している。Cf. Federico Ferrari et Jean-Luc Nancy, *Nus sommes*, Yves Gavaert, 2002. ジャコメッティ『エクリ』矢内原伊作ほか訳、みすず書房、1994年、221頁。

(第9-11段落)

(いずれにせよ、身体がなぜこれほどの憎悪を掻き立てるのは問わないでいただきたい。)¹

(なぜそれが、堅苦しい語なのか、窮屈な、けちくさい、冷ややかな、興を削がれた語——しかし同時にまたむかむかする³、脂ぎった、いかがわしく、淫らで、ポルノ視線的な²語——なのかは問わないように。)

(今思い当たる所では、この身体=物体なる語を救うには3次元ないしn次元の美しい幾何学図形や、麗しき不等角投影図をもってするほかにはない。だがそうすると、一切は宙に浮いて漂い、物体は着地しなければならないことになる⁴。)

注解

1. 「問わないこと」 Qu'on ne se demande pas... : que + 動詞接続法はとりわけ三人称で命令・奨励・禁止(命令的意味)や、祈願・願望・後悔・呪詛(希求的意味)に用いられる。

2. 「むかむかする」*dégoûtant* : 直訳すれば「嫌悪感を起こさせる」という動詞 *dégouter* の現在分詞で、直前の過去分詞「興を削がれた *dégouté*」と対比的に置かれる。

3. 「ポルノ視線的」*pornoscopique* : 英語の *pornoscopy* はとくに昆虫の交配の観察を意味するが、フランス語の主だった辞書に *pornoscopie* という語は立項されていない。本書以前のリオタールによる用例として以下。Cf. Jean-François Lyotard, *Les transformateurs Duchamp*, Galilée, 1977 ; Leuven University Press, 2010, p. 172. また1983年のオムニバス作品『愛の群島』*L'archipel des amours* 中に、ジャン＝クロード・ビエットが監督を務めた *Pornoscopie* と題する約7分の短編がある。

『コルプス』以後に刊行された「フレンチ・セオリー」をめぐる論集に文字どおり「ポルノスコーピー」と題する章を寄稿したベルギーの批評家ジャック・ルイユは、映画『ピーピング・トム』(1960年、邦題『血を吸うカメラ』)による「窃視的欲動 *la pulsion scopique*」と視線の「浸透＝挿入 *pénétration*」との同一化を指摘しながらポルノグラフィ的「構想力」を論じている(ただし、題に掲げられた語は本文に登場しない)。Cf. Jacques Leuil, « Pornoscopie », Mark Alizart et Christophe Kihm (dir.), *Fresh Théorie*, Léo Scheer, 2005, p. 514 sq.

ルイユは精神分析について直接言及していないが、「視認(窃視)的欲動」という表現はラカンが用いたものでもある。Cf. Jacques Lacan, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Seuil, 1964, p. 21, 74, 78, 95, 132, 157, 164, 166, 177 et 182 ; id. *Autres écrits*, Seuil, 2001, p. 188 et 219. ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』小出浩之ほか訳、岩波文庫、上巻、2020年、41, 172, 181, 224頁；下巻、55, 119, 134, 138, 165, 177頁。さらにこの語の広がりとして「窃視症(的) *scoptophilie, scoptophilique*」, 「自己像視的 *autoscopique*」といった語彙を参照。Cf. *Autres écrits, op. cit.*, p. 43, 75 et 77. 『家族複合』宮本忠雄・関忠盛訳、哲学書房、1986年、63, 146, 152頁；『二人であることの病い』宮本忠雄・関忠盛訳、講談社学術文庫、2011年、163, 170頁(ただし『精神分析の四基本概念』下巻、112, 138頁の「窃視(症)」の原語は *le voyeurisme*)。

4. 「着地する」*toucher terre* : 船が着岸・入港すること、転じて飛行機が着陸すること。宙に浮いた身体＝物体の降下・落下という運動が再度みられることに注意を喚起して、「しなければならない」*doit < devoir* という助動詞が強調されたものと思われる。触れる *toucher* という動詞もナンシーの鍵語。

最後に、「注解(一)」, 94頁、注解4に関して、対比的に補足しうる一節として以下。「器官なき身体は骨と血だけで作られる」。Cf. Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 108. 『意味の論理学』小泉義之訳、河出文庫、2007年、上巻、171頁。

(続)

*前稿・本稿ともに、資料調査等に際して東北大学大学院博士課程に籍を置く仲丸有紗氏の手を煩わせた。記して感謝する。

Commentarium in Johannis-Lucae Nanceii *Corpus* (2)

KAKINAMI Ryosuke

Nous présentons ici la suite de nos commentaires critiques de *Corpus*, ouvrage écrit par le philosophe français Jean-Luc Nancy au début des années 1990 et continuant de susciter de l'intérêt chez de nombreux lecteurs du monde entier qui s'intéressent à la question du *corps*, y compris des écrivains, des cinéastes ou des chorégraphes... Avec environ cent pages dans sa première édition, ce livre relativement court contient néanmoins un immense contenu offrant le panorama des problèmes posés par nos corps. Riche en informations et en méditations, appelé « le *Peri Psykhès* de notre temps » par Jacques Derrida, ami de Nancy et lecteur perspicace de son ouvrage, *Corpus* reste aujourd'hui encore à être lu et relu, déchiffré et interprété, examiné et développé.

C'est pour cette raison que nous proposons la deuxième partie de notre *Commentarium* sous la même forme que la précédente ; on trouvera ainsi les (res)ources aidant à discerner les contextes historique, culturel ou philosophique de ce petit *magnum opus Nanceii*.

